
とある青年、落っこちた。

天孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある青年、落っこちた。

【Nコード】

N7304X

【作者名】

天孤

【あらすじ】

地球から、異世界に“落っこちて”しまった、とある一人の青年の物語――…

第1話 異世界？知るかそんなもん。（前書き）

後悔はしていない、反省はしている。

なぜか始めたくなったオリジナル小説。

正直、すぐに飽きてしまう可能性があるのですが、期待せず、パソコン画面から離れて見てね。

第1話 異世界？知るかそんなもん。

「ぐふおつ……！？」

どすん、と少し間拔けな感じに尻から落ちた俺は、強打した尻の痛みに悶絶しながらも、突然起きた“不思議”に理解を得ようと頭を働かせた。

まず、何故俺はケツからこけてしまったのか……まあ俺がドジだったとかだったらいいが、ケツから落ちるとかそこまでドジではない。まあ自分の足に引っかけたてこけるとかなら、何回があるが……。それドジじゃね？ という疑問には答えない。

それはともかくなぜケツから落ちてしまったのかというと、まあ、わからない。厳密に言えば、一瞬の出来事過ぎて理解できなかったと言っべきか。

歩いていたら、落とし穴にはまったような感覚があつて、その後には尻を強打。そして悶絶。俺にどうしろと…。

これは親友の田中（笑）の陰謀か？ とか思ったりしてみたが、自分の周囲にはまさかの森が………笑えない現実に、全俺が泣いた。

とまあ現実から逃避しても仕方ないので、いまだに痛みを残すプリプリのMyお尻をさすりながらも、立ち上がった。

もう一度周囲を見渡すも、やはり森、森、森。熊とか猪とか、肉食系な動物さんたちが出てこないか不安だが、俺のチーターも驚く逃げ足があれば、逃げ切れること間違いない…… たぶん。

「ちなみに俺の名前は春野歩です」

さみしくなったので自己紹介してみた。独り言なので余計寂しくなった。

ちなみに高二。まだまだぴちぴちです。

[illegible]

とりあえず寂しさを紛らわすために歌を歌いながらも、村的な人の集まっている場所を見つけるため、森の中を歩き出した。

といつてもあまり現状に変わりはない。いつまでたつても木ばかりが目映る。そろそろ村とか集落とか見つかつてもよくね？ と思つてたりするんだが、神に俺の願いは届かないらしい。

と思った矢先、前方に人影が。コレキタと思い、声をかけようと近づくと、人影の正体を見た俺は驚きに心を染めた。

子供みたいな体形、緑色をした肌、鋭い牙と手に持った棍棒的な武器、まるで鬼みtainな形相に俺は思う。これなんてゴブリン？

「ぎゅおおおッ！！」

「でゅあっちッ！？」

俺の姿を確認した瞬間、手に持った棍棒で襲ってきたゴブリン？の攻撃を、某ウルトラ戦士の掛け声的な声を出しながらその攻撃を避けた俺は、あわあわと慌てながらも急いでゴブリンから距離をとる。

果てしなく俺の動きはスマートではないのだが、命をかけそうなのこの雰囲気はスマートさはいらない。というか勘弁してくださいゴブリンさん。俺がおいしそうだと言わんばかりに涎とか垂らさないでください。

あれ？ 意外に余裕あんじゃね？ とか思いながらも、俺はこの現状を切り抜けるために、知能のない頭を働かせる。

まず敵は1匹、体格的にも身体能力的にも勝ってそうだが、油断はしない。あちらには武器があるが、こちらは素手。そもそもゴブリンで普通、集団で行動してそうだし、近くに仲間とかいるかもしれない。仲間を呼ばれる前に、即急に倒したいところだ。なので――

……

「アユム、いきま——すッ!」

「ぎゅお!」

某ア。口さんの声を出しながら、俺はゴブリンに向かって駆け出す。突然の俺の行動にゴブリンは少し驚いたようだが、すぐに平静になると棍棒を構え、こちらの行動を注意している。カウンを狙っているようだが、俺もカウンを食らうほど馬鹿ではない。俺は足元の砂を手にとると、ゴブリンにむかって投げつけた。

「ぐお……ぎゅうう……」

ゴブリンは目に入った砂を棍棒を握っていない方の手で擦りながらも、棍棒をめちやくちやに振り回す。俺を近づかせない作戦だろうが、俺は棍棒に注意しながらもゴブリンの後方に移動すると、その隙だらけの背中を思いっきり蹴飛ばした。

「ぎゃんッ!」

顔を地面で擦りながらうつ伏せに倒れたゴブリン。俺はその背中に乗っかると、ゴブリンの頭を掴み、地面に叩きつけた。

「ぐぉん!？」

二度三度と何回も叩きつけていると、最初は聞こえていたゴブリンの悲鳴も、聞こえなくなっていた。どうやら気絶しているようで、息はしていた。

別に殺すことが目的ではないので、これでいい。というか殺すには少し勇気がないし、それ以前に刃物とかないと殺しにくそうなのでやめた。首を絞めるとかもあるけど、それってなんかキモイなと思った。

まあとりあえずゴブリンを木に巻きついていたツタとかで縛り上げると、見付かりにくそうな茂みに隠しといた。ほかの魔物的なやつに見つかって食べられるのもかわいそうだし、第一にはかのゴブリンが見つけると、俺の身が危なそうなのでそうしといた。

「よし。じゃ、そついう事で……」

俺は 気絶中のゴブリンに別れを告げながらも、村探しの旅を再開した。

.....

.....

そして、二時間後。俺は森を抜けることが出来た。ここはなかなか高所なのだろう。ここからは遠くの風景が見渡すことが出来た。

あれは湖だろうか。前方に広がる草原の向こうには大きめの湖があり、さらにその向こう側には、小さくだが建物が立ち並ぶ村、もしくは街らしきものが見える。まあ規模はあまり大きくなさそうなので村だろう。

「ま、とりあえず行ってみるかね」

俺はふう、とため息をつきながらも、草原を歩き出した。

そして30分ほど歩いただろうか、目の前に変なものが現れた。見た感じ水たまり、でもぶるぶるうごめいている。まるで「ぼくは悪いスライムじゃないよ。ほんとだよ？」と言っているようだ。……はい、スライムですね。わかります。

うん、やっぱりファンタジーだね。まあゴブリンが出てきた時点で地球ではないと思ったけど。まさかの異世界フラグ、テンプレありがとうございます。

と、そんなことを考えている場合ではない。こういう生物は打撃

では死なない。というか斬撃でも死ぬだろうか。魔術、魔法的なものじゃないと死ななそうにないのは、俺の思い込みなのだろうか。でもよく見てみるとスライム的な体の中に丸い核的なものが見える。あれを潰せば死ぬだろうか。俺はこの森で見つけた棍棒（厳密に言えばゴブリンが持っていたもの）を手に握り締めると、核に向かって振り下ろしてみた。

——ぶちゅ……ぐちゃ……

振り下ろした棍棒を上げてみると、なぜか核が移動していた。もう一度振り下ろしてみる。しかしまたしても移動している。そしてもう一度振り下ろす。しかし……もう一度……またしても……一度……しか……一度……。

ひとつわかったことがある。スライムは俺に喧嘩を売っているようだ。なぜかスライムが俺のことを嘲笑っている気がする。……スライム、てめえは俺を怒らした。

俺は棍棒を地面に置くと、右手をスライムに突っ込み、核を握った。そのまま立ち上がると右手を掲げ——…

「スパアアアキイイングッ！——！」

——握り潰した。

その時の俺の目は、某史上最強な弟子の師匠のように光を灯していたであろう。それぐらい怒りに満ち溢れていた。

しかしスライムを握りつぶした俺は怒りもスツと消え、手に滴っていたスライムの残骸もスツと消えた。

「……………えー」

死体が消えるというまさかの怪奇現象。

見てみると核を握っていた俺の右手の中には、銅色をした数枚のコイン。

うーん、まさにテンプレな現象だ。これが異世界パワーか。まあこのお金であろう物がもらえるなら、この程度のこと気にもしない。さすがに驚きはしたかな。

しかし、これはやはり……

「稼ぎ時ですね、わかります。テンプレありがとうございました」

この世界の通貨持っていない俺にしちゃ、ここで稼がないと住むところもない、ご飯も食べれないで、散々な結果になるところだ。ここで俺にも運がまわってきたようだ。しかしだが、この程度のお金では食べ物も十分には買えまい。

ということとで俺の草原無双が始まります。

|| || || || || || || ||

「スパアアアキイイングッ!!!」
頭の上で握り潰す

|| || || || || || || ||

「ゴットフィンガアアア!!!」
自分の前方で握り潰す

|| || || || || || || ||

「しゅりゅうけえええんッ!!!」
下から上にかけて腕を振り上げながら握り潰す

|| || || || || || || ||

「エクス、カリバアアア——ッ（笑）!!!」
棍棒使用

兵士みたいな人が少し暇そうに立っている。予想より規模の大きい村のようで、村と言うより街と言ったほうがしっくりきた。

これは普通に入っているのかなーと思いながらも、門を通ろうとすると流石に門番の人が止めてきた。

「ちょっとまってー。なに通ろうとしてんの、君は。通行証みしてみ」

なにげに軽い人だ。こんなでいいのか、門番。とか思いながらも焦る。俺通行証とか持っていないんですけどー！！

「……持っていないです」

結果、正直に言ってみた。

「あつそ。じゃあ軽く検査するから、動くなよ」

門番のひとはそういうと俺の鞆やらポツケやら確認した後、もう一人の門番の人と話すと、俺は待合室的なところに連れていかれた。

「通行証、発行するからここで待つといてくれ」

「はあ……」

発行するためなのか、その人は部屋から出て行った。
……と思っただけで帰ってきた。

「わりいわりい、名前聞くの忘れてたわ」

「歩です」

「アユムな、わかったわ。少し待つといってくれ」

そういつと出て行った。今度は帰ってこなかった。

苗字を言つか迷ったが、大体異世界って貴族とかが苗字持つてる
ばいから、結局言わないことにした。

いま思っただけで検査つてめっちゃ軽く終わったな。こんなんでい
いのか異世界のとある街。

そして数分たったであろうか、あの門番が帰ってきた。

「ほら、通行証」

門番の人は通行証らしきものを投げてきた。

「うおっと……」

手に収まった通行証は木の板で、形は絵馬で使われているあの板の形。丈夫そうな板で、何回も使われているのか、傷などついていて結構古くなっている。

「この街を出るときは返してもらうからな」

「そういえばこの街って、名前なんて言うんですか？」

そういえばこの街の名前を知らなかったことに気づき、門番の人に聞いてみることにした。名前も知らないのはおかしいと思ったけど、まあなんとか誤魔化すしかない。

「ん？　なんだ、知らないのに来たのか？」

「はい。世界を放浪中として、目的もなしに旅を続けています」

「ふーん……まあいい、この街の名前はリベリア。特産物と言えば、畜産のブルとか、あとは武器の製造で少し有名かな。まあドワーフの鍛冶には負けるがな。ちなみにブルージョア王国に属している」

「へえそうなんですかー」

名前以外にも情報を得られたのはラッキーだった。ブルとか意味わかんないものも出てきたが、それは後々情報を集めればいいたろう。

つーかブルジョア王国って、金持ちそうな国だな。ブルジョアみたいな。

「そういえばこの街で安くていい宿ってどこですかね？」

「んーそうだな……この街の西にある『ビビンの宿』がいいと思うぞ。女将さんはおっかないが、宿賃は安く、飯はうまいでいいところだ」

「そうですか、ありがとうございます」

「そういえばその鞆の中のものはどうすんだ？」

鞆の中身と言えば、角やら毛皮やら肉など、魔物たちのなれの果てのことかな？

「売りたいんですけど……どこかいいところあります？」

「それならギルドに行けばいい」

「ギルド？」

ギルドと言えばあのギルドだろうか？ テンプレどおりなら素材を売ったり、ギルドに登録も出来たりするだろう。これは行くべきだな。

「ああ、今日は遅いから明日の朝にでも登録でもしたらどうだ？
そしたら素材でも売ればいい」

「素材は登録しないと売れることは出来ませんか？」

「まあ道具屋でも売れるっちゃ売れるが、素人じゃぼったくられるぞ。それにかわりギルドは適正価格で買ってくれるし、俺はそっちのほうをオススメするがな」

なるほど……じゃあギルドに行かないといけないか。どっちみちギルドを知ったからには、登録しようと思ったし。それ以外には働くところなんてないしな。生きるためにはお金が必要なんです。

少し道に迷いながらも、無事にたどり着いた先には『ビビンの宿』と書かれた看板が掲げられた建物があった。そういえば普通に読めているが、これも何かの恩恵か？ まあ便利なので不満はない。

とりあえず俺は宿の中に入ってみる。見た感じなかは結構きれいで、装飾はないが、我が家のような雰囲気をもった宿だ。一階は酒場のように何人かがすでに酔いつぶれていたり、顔を赤くした野郎どもがいる。どうせなら美女がよかった。

「いらっしやいッ！！！」

びくつとしてしまったのは仕方あるまい。誰しもあんな大声で声をかけられれば、はねるように驚くに違いない。

声がした方を見ると、カウンターの奥にある調理場から少しぼちやりとしたおばちゃんが歩いてきた。

「ここらじゃ見ない顔だね。泊まりかい？ それとも飯かい？」

「泊まりで。とりあえず三日ほどお願いします」

「行儀が正しい子だね。どっかいいとこの育ちかい？」

「いえ、それほどでもないです……」

この世界では地球の教育は育ちがいいと言えるが、それを言う必要はあるまい。

「まあ、いいよ。三日だから朝昼晩ご飯込みで銅貨42枚だね」

俺は鞆から銅貨を42枚取り出すと、宿のおばちゃんに渡した。

「え」と……うん、ちゃんとあるね。さきにご飯食べるかい？」

「いえ、荷物を置いてきてからにしようと思うのでそれから頼みます」

「席は空けとくからすぐに下りてきな。何を食べるかはこっちで決めてあるから」

「あ、はい、わかりました」

俺は鍵をもらい荷物を部屋に置くと、しっかり鍵を閉めたのを確認すると、一階に下りてきた。

「ごはんは置いてあるから、冷めないうちに食べな。食べ終わったら、皿はカウンターの端にある台に置いておくれ」

「わかりました」

俺はそういうと席に座り、置かれた料理を見てみた。

見た感じ鳥肉ぽい感じのやつと、サラダ、固そうなパンとスープがあり、なかなかおいしそうな料理だった。というか実際おいしかった。パンは固かったが、スープに浸して食べるという感じにやわらかくなった。

料理を食べ終わった俺は皿を台に置くと、部屋に戻ってきた。

荷物は部屋にある小さな丸テーブルの上に置いている。内装はその丸テーブルにベットだけで軽く収納スペースがあり、鍵ありと鍵なしの収納スペースが一つずつがあった。あとは尿などをする大きな目の壺だろうか。

「ふう……疲れた……」

今日はいろいろあって疲れた。俺は上着を脱ぎ固いベットに寝転ぶと、

そのまま沈んでいくように眠りについた。

明日はギルドに行かなければならないな——……

続く

第1話 異世界？知るかそんなもん。（後書き）

白金貨	↓ 10億
白銀貨	↓ 1億
大金貨	↓ 5000万
金貨	↓ 1000万
半金貨	↓ 500万
大銀貨	↓ 100万
銀貨	↓ 10万
半銀貨	↓ 1万
大銅貨	↓ 500円
銅貨	↓ 100円
半銅貨	↓ 10円

てな感じでいいでしょうかね。

第2話 ギルド、それは男のロマンである。

そして次の日、俺はギルドにやってきた。

今回は冒険者としての登録、ギルドカードの入手、そして素材の売買が目的だ。まあギルドカードがあるかは知らないし、わかることもあまり多くはないので、情報収集も兼ねようと思う。

ということが入ろうかね、ギルドやらに。

ギィィィ——っ　と古くなったドアが音を鳴らし、俺はギルド内に足を踏み入れる。中は洋風なつくりで、想像より小奇麗な感じの建物だった。といっても冒険者であろう野郎どもが何人かいるので少しむさい。冒険者の中には少数ではあるが獣人がいたり、豪傑そうな女性もいたりする。

俺がギルドに入ると何人かがこちらに視線を向けてきたが、すぐに興味を失ったのか視線は霧散した。服は上等なもんだが、俺自身は特に変わったところはない。そりゃあ興味もなくなるわな。まあいいけどな、そう心の中で呟きながらも、俺はギルド職員であろう女性が生座っているカウンターに向かう。

「冒険者ギルドへようこそ。本日はご依頼でしょうか？」

登録なんだが……まあ武器も持っていないし、冒険者になろうとは思わないだろうな。

「いえ、冒険者としての登録をお願いします」

「そうですか、失礼いたしました。それではこの紙に氏名・種族・希望職業・ご使用になる武器・特技などを記入ください。その他事項は一番下の空欄にご記入してください」

女性はそういうとカウンターの下から一枚の紙を取り出すと、カウンターの上に置いた。

しかし困った。俺はこの世界の文字をひとつも知らない。

「あの……代筆をおねがいします。文字知らなくて……」

「わかりました。——では氏名から順にお願いします」

「名前は歩、種族は人間、希望職業は……例えばどういふのを言ったらいいんですかね？」

さすがに学生は駄目だろうし、特に思いつくことがない。

「剣士、魔法使い、魔法剣士、狩人、格闘家など主に自身が得意とした武器を使った職業をお願いします」

「では…… とりあえず剣士で」

だって魔法があるにしても、自分がそれを使えるかはわからんな。

「はい、次をお願いします」

「使用武器は剣、特技は足の速さ、後は特にないかな」

「……はい、以上でよろしいですね？」

「はい」

「では次にギルドでの約束や仕組みを説明いたします」

ギルド職員の女性は紙をしまい込むと、ギルドでの約束など仕組みを説明し始める。

「まず、ギルドでは冒険者同士の問題などには基本的に干渉いたしません。冒険者同士で戦いが起きても、相手を殺さない限りは干渉を貫くのでご了承ください。ですが依頼者への暴力などがあつた場合は、直ちにギルドの立ち入りを禁止、冒険者としての資格を剥奪いたします。依頼者に不備があつた場合は考慮されますが、あまり褒められたことではありません。殺人も見つかった場合は、犯罪者として処理されます。ほかにも約束はありますが、それはその都度お知らせします。次に仕組みをご説明いたします」

女性はこほんつと、かわいらしくのどを鳴らすと説明を再開する。

「冒険者には“ランク”というものがあり、Fから始まり、上はSまであります。といってもSランクの冒険者は世界に数名と言つたところでしょう。この“ランク”を上げるためには、ギルドに寄せ集められた依頼を受諾し、達成することによってあげることが出来ます。依頼は基本的に周辺の村や街、個人的な依頼など多々集まってきます。国からも依頼されることもあります。それは高位の冒険者にならないと受けることは出来ません。依頼には薬草の採集、魔物の討伐、遺跡の探検、護衛任務など多岐に渡り、依頼によっては大金を得るのも夢ではないでしょう。しかし大金を得られる依頼と言つのは大きな危険と隣り合わせです。そこを理解して、自分の実力に合わせた依頼を受けられることを推奨いたします。といってもランクに合わせた依頼しか受けられないんですけどね」

「はあ……まあ頑張ります」

「はい、頑張ってください」

彼女はそう言いながら微笑んだ。

[illegible]

「そういえば武器とか防具を買いだすけど、いいところってありますかね？」

俺がそういつと彼女は少し考え言った。

「そうですねー……ギルドから出て、右をまっすぐ行くと突き当たるんですけど、そこを左を行ったところに『ベリメール』というお店があるのでそこがお勧めですね」

「そうですか、ありがとうございます」

「いえいえ。ではギルドカードはこの後すぐに出来るので、その椅子に座ってお待ちください」

彼女はそういつと奥の部屋に引ッ込んでいった。

それにしてもベリメールか……あとで早速行ってみようかな。そして数十分すると彼女は帰ってきた。

「お待たせしました。これがアユム様のギルドカードになります」

彼女が持ってきた板のうえには銅色をしたカードが一枚乗っていた。

「このカードに触れてくれますか？」

俺は言われたとおりカードに触れてみる。するとカードはポワァと淡く輝くと、カードに俺の名前やギルドランクでもあるFと言う文字が浮かび上がった。

「これでこのカードは正真正銘あなた様の物になりました。どう

ぞお納めください」

「ありがとうございます」

俺はそのカードを手にとるとチラッと見て、ポケットにしまった。ちなみに今更だがランクであるFやSは、わかりやすく地球の英語で表記しているが実際はそんなものではない。俺にわかりやすく翻訳されているだけで、英語ではない違う文字である。

「それではこれで終了となりますが、ギルドでは武器、魔法の扱い方を教える講座を開いておりますので、武器などをお買いになられたあとと受けてみるというでしょう。講座は三コースあり、初級コース、中級コース、上級コースとなっております。講座参加費は初級で銅貨20枚、中級で大銅貨10枚、上級で半銀貨1枚になりますのでご気軽にご利用ください」

なるほど、2000円に5000円に1万か。安くはないかもしれないが、高くもないな。俺は何もかもが初心者だし、受けてみたほうがいいかもしれないな。というか受けよう。

「わかりました。武器を買った後、初級コースでも受けてみようかと思います」

「そうですか。ではまたのご利用をお待ちしております」

彼女の言葉を受けると、俺はギルドを出て行った。次の目的地はベリメールである。

.....

.....

.....

.....

「ここか.....」

俺の目の前には剣と剣がクロスに交差した看板が掲げである建物がある。

わかると思うが武器や防具が売ってあるベリメールである。ま、とりあえず入ろうかな。

——カラン、コロソ

ドアについていたベルのようなものが揺れ、俺が入ってきたことをお店の主人に知らせる。

「いらっしやーい」

コツコツと足音を響かせながら奥からやってきたのは、羊の角み
たいのがついた美女であった。
ちなみにその美女は巨乳だ。まさかの伏兵に俺のシャイな心臓は
どくんどくんいつている。

「あら、若い男の子ね。冒険者？」

「あ、はい。なりたてですけど…」

「へえ…武器と防具をお求めかしら」

「はい」

「何がほしいの？」

美女はその大きな胸を腕を組んで強調しながら、俺に問い掛けて

きた。

「一通りの防具とロングソード、大き目のナイフに、補助の短剣を二本貰えますか？」

「わかったわ。じゃあ持ってくるから少し待っててね」

美女は奥の部屋に行くと、皮製の防具と、一振りのロングソード、大型ナイフ、小型ナイフを二本持ってきた。

「防具の大きさはこのベルトで調整できるから。ロングソードは初心者扱いやすく、丈夫なものを用意したわ。大型ナイフには腰に付けられるベルトをおまけして、補助のナイフも付けられるようになってるわ」

「ロングソード用のベルトも貰えますか？」

「腰用？ それとも背中に背負えるようにするかしら？」

「そうですね……背中に背負えるようにしてください」

背負い鞆が邪魔になるかもしれんが、まあ大丈夫だろう。

「それじゃあ、このベルトもオマケしちゃうわ」

そういつてロングソード用のベルトも渡してくれた。

「いいんですか？ そんなにおまけしてもらって……」

「…うーん、なぜか君は大物になりそうな気がするのよね。まあ将来に向けての投資みたいなものよ」

「……結構適当な理由なんですネ」

「まあね。女の勘みたいなものよ」

女の勘はおそろしい。よくわからないが、女の勘ほど怖いものはないと思う。

「防具の付け方わかる？」

「…実はわかりません」

いま俺は森にいる。何故かというとお金がないからだ。あの後ギルドで初級コースを受けようかと思ったけど、流石にお金が減っているので余裕を持ったために、簡単な依頼を受けて、お金を稼ぐことにした。今回は薬草の採集をすることにした。

「といつてもねえ……どこにあるんだか……」

一応ギルドで薬草の見本を見たが、あまり見つからない。薬草の名は“ナトリア草”。回復ポーションを作成するときの材料で、常に依頼としてギルドに出ているらしい。

これを10個集まれば依頼完了。余分に取ってきてても、ギルドで買ってくれるらしい。この時期はあまり生えていないので、少し値段は高くなっている。

「これは稼ぐチャンスですね、わかります。といつても見つからないが」

まだ採集した薬草の数は3つ。あと7つも見つけなければいけない。

「もっと奥のほうまで行ってみようかな」

俺は魔物に注意しながらも、森の奥のほうを目指し歩き出した。

.....

.....

.....

.....

奥のほうに來ると、なんか穴があった。結構深そうで落ちたらまずケガをしそうである。

「なんじゃこれ」

風が通ってるぼくて、どこかに繋がってると思われる。

俺はもっと穴の奥のほうを見ようと乗り出してみると、後ろでガサツと音が鳴った。俺は振り返るうとして――...

「えっ？」

——穴に落ちた

足場の地面が崩れたのだ。どうしようもなく運のない俺である。
ちなみに後ろに何かいたと思う？ 何もいなくてたぶん風でした。

「ああああああ——……」

そのまま俺は穴の底にむけて落下していった。

——どぼおおんッ！……！

「うぼうぼ……」

まさかの穴の下は水でした、という現実にはラッキーと思いながらも、いち早く酸素を求めて水面向けて俺は泳ぐ。これが固い石だったりしたら、俺のケツは二等分から四等分に変わっていただろう。つーか軽く死ねる。

「ぶはっ！ はあはあはあ……」

息を荒げながらも陸を何とか見つけ、そこに向かって泳ぐ。一応水にぬれて困るものは持ってきていないので、荷物の心配はない。剣が濡れるのは少しいただけなが、乾かせばいいので大丈夫だろう。

「あ——……疲れた——……」

初の依頼でこれでは、これからの依頼、心配になるばかりである。と、ふと目を横に向けてみると、そこには目的の薬草が宝の山といわんばかりに生えていた。なにこれこわい。

「ヤックデカルチャ——……」

そしてギルドに帰ってきた俺。見つけた出口の外はなんと街の近くに繋がっていた。草木にうまく隠れていて、いままで誰にも見つからなかったであろう。

「こ、これはまた……大量に見つけてきましたね」

「俺が本気を出せばこんなもんだ」

偶然ですが、なにか？

「えーっと、全部で100個ほどありますね。Fランクの依頼、10回分の成功です。ランクがEに上がりました、おめでとうございます」

まさか一度の依頼で10回分を達成するとは思わなかったのか、彼女の顔は引きつっている。

「カードを預かります」

俺は彼女にカードを渡し、彼女がそれをカウンターの上有る水晶にかざすと、銅色だったカードは銀色に変わり、Fの文字はEに

変化した。

「これで正式にEランクとなりました。次に報酬ですが、通常依頼報酬は大銅貨10枚、その10倍ですので、半銀貨5枚となります」

「どうも」

俺は半銀貨を手にとると腰に下げた皮袋の中にそれを入れる。この袋はベリメールでもらった。

「次の依頼もお待ちしております」

職員さんのお辞儀で見送られる、というか……。

「名前って教えてくれませんかね？」

「え？ わたしですか？」

うんうん、と俺はうなづく。

いつまでも知らないってのも不便だしね。

彼女は微笑みながらも答えてくれた。

「私はエルカナと申します。どうぞよろしくお願いします」

「こちらこそ」

じゃ、と名前を聞いて満足した俺はギルドを出て行った。

明日は何の依頼を受けようか、俺はそう考えながらも街中に消えていった。

続く

第2話 ギルド、それは男のロマンである。(後書き)

ギルドカードの種類

- S ランク ↓ 黒い金属：ダマスカス鋼
- A ランク ↓ 赤い金属：ヒヒイロカネ
ブラチナ
- B ランク ↓ 白金
- C ランク ↓ ミスリル銀
- D ランク ↓ 金
- E ランク ↓ 銀
- F ランク ↓ 銅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7304x/>

とある青年、落っこちた。

2011年10月20日02時06分発行